

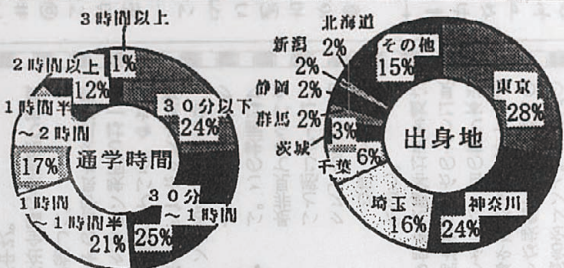
# アンケート結果発表

## ～東薬生の実態を探る!!～



発行所  
東京薬科大学  
新聞会  
責任者  
松澤敏広

### 六月号

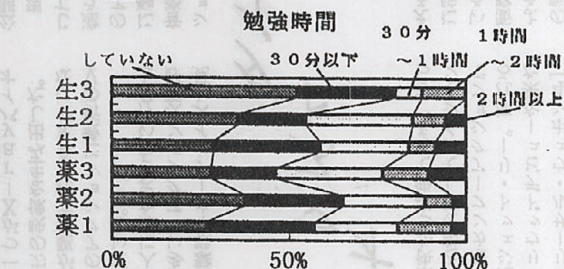


先日、新聞会では一年生から三年生までを対象に大学生生活などについてアンケートを行った。結果は左のグラフの通りである。

「卒業後の進路」の項目では、四年生にならないと実感がないからだろうか、決めていないという人がほぼ半数を占めている。生命科学部では学年が上がるにつれて「進学」が徐々に減少し「就職」が大幅に増えている。

「毎日の平均学習時間」の項目では、学年が上がるにつれて、薬学部は学習時間が増えている。これは、国家試験があるためであろう。それに対して、生命科学部では減少している。進路の項目と照らし合わせる、進学希望者の減少と学習時間の減少が比例しているようにも見える。

「通学時間」の項目では、「一時間以内」という人が半

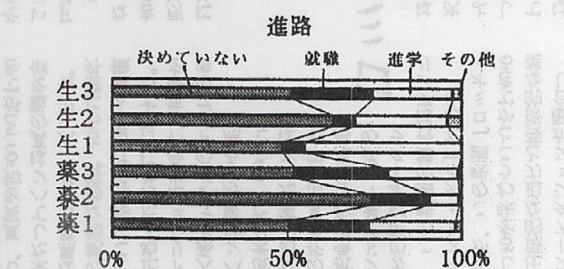


数を占めている。しかし「三時間以上」という人も少数だが存在した。

「アルバイト」の項目では「している」という人が約四割を占めていて、多いものでは飲食店、塾講師、家庭教師などがみられた。他に、神社巫女、デザイナーなどのバラエティーに富んだ回答もあった。時給は八百～八百五十円が最も多く、職種によっては三千円以上という人もいた。

「東薬お気に入り」の場所」の項目では多い順に部室棟、ベンセン池、情報センターである所、休講の掲示板前などのユニークな回答もあった。

「東薬に来て良かったか」との項目では「良かった」と回答した人は約三割を占めていた。その理由には「家から近い」などの他に「やりたかったことと違う」や「授業



が厳しい」などがあった。反対に「良かった」という回答では「授業が楽しい」などがあつた。気持ち次第で学生生活は良くも悪くもなるのではないだろうか。何事にも積極的に参加して毎日より良いものにして欲しいと思う。

阪神・淡路大震災の後、日本でもPTSD(心的外傷後ストレス障害)という言葉が耳にするようになった。その後も、PTSDという言葉が広まったが、被害者への正しい接し方などはほとんど認識されていないのが現状である。

PTSDとは、生死が危ぶまれるような出来事に遭遇したり、目撃した後に発症するものである。

発症するきっかけは、幼児虐待、性的暴行などの犯罪や交通事故、自然災害など様々である。現在、PTSDを引き起こすメカニズムが医学的に解明されつつある。だが、完全な治療法はまだ確立されていない。

## 心のケア

また、犯罪被害者の場合、執拗な事情聴取や長引く裁判によって症状が悪化するケースも多い。こういったことを考慮して、平成八年から全国の警察では相談窓口の設置など、被害者支援の取り組みを始めている。

窓口や支援センターなどが利用しにくくなっている。この状況を改善するためには、まず社会全体の誤った認識そのものを変えていかなければならない。そのためには、警察と医療機関は、協力して積極的な広報活動などをする必要がある。それと同時に、専門家の育成や支援組織への補助などが成されるべきである。しかし何より

ところが日本社会では、精神障害になるのは心が弱いからだという考え方が未だに存在する。その上、時間が解決してくれる、早く忘れれば良いといった安易な考え方も一般に定着している。こういった風潮によって、相談

## Early Exposure

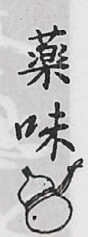
五月中旬から下旬にかけて薬学部の一・二年生を対象として、Early Exposure(見学会)が実施された。見学会は、東京薬科大学付属第三病院(以下第三病院)、東京医科大学八王子医療・薬剤センター、北里大学病院、同東病院、グレルン製薬、佐藤製薬の計七カ所であった。

今回はこれらの中で第三病院、北里大学病院、東京都立衛生研究所を紹介する。

第三病院の薬剤部では薬剤師が患者に接している姿を見学した。また薬品研究の説明を受けた際には、飲みやすく工夫されている例として、子供用咳止めのシロップを実際に飲んだ。さらに病院の歴史、五つの部門の紹介、今後の病院薬剤師の在り方などについて書かれた資料を頂いた。

北里大学病院の薬剤部は主に医薬品情報の提供と管理、医療品の管理、調剤や服薬指導を行う三つの部門に分かれている。今回はこれら全てを見学した。今回は、薬剤管理部門では、モルヒネや向精神薬など、厳重に管理されている医薬品を見ることができた。東京都立衛生研究所では毒性部特殊動物実験室、医薬品研究科、食品添加物研究科を見学した。毒性部ではラットを利用して、医薬品研究科の研究について、医薬品研究科では薬品の副作用を引き起こす原因や製品となる過程について詳しい説明を受けた。食品添加物研究科では食品に含まれる着色料や甘味料などを実際に手に取って見る事ができた。

今回紹介した内容はほんの一部に過ぎないので、詳しく知りたい人は参加した人に関する限り、各自調べてみるという



CD店へよく行くのだが、ちょっと気が変わったことがある。多くのレコード会社が、みんな同じような、いわゆる「名盤」キャンペーンを展開しているのだ。「三枚買ってもう一枚プレゼント」というやつである。しかも、その対象商品の大半が洋楽の七十年代～八十年代末の作品で占められている。どうも最近はこの年代の作品の売れ行きがあまり良くないらしい。▲それならば、かつて誰もが持っていたレコードであり、音楽好きなら知らない人はいないはずだった。しかし十年以上も経つと、それを知らない人の方が多くなっている。だから今単に「名盤」と言われてもいまいちピンとこない。分かってるのは、高い評価を受けた作品らしい、ということだけである。▲とはいえ「名盤」と呼ばれるからにはそれなりの理由があるはずだ。それを自分の耳で確かめてみるのもいいかも知れない。ただの流行で終わらなかつたからこそ今まで生き残ってきた時代ではないだろうか。文化は時代を映す鏡だといわれるが、音楽だって例外ではない。程度の差はあるけれど、時代背景は何らかの形で当時の音楽に影響している。その例として、力強いメッセージや説得力を持った音を見つけたら、その背景を探ってみるのも面白いかも知れない。▲これらの作品は現在活躍している多くのミュージシャンの憧れの音となり、あえていはずである。好きを与えることは、決してただの懐古趣味には終わらないと思うのだが。

